トルコにおけるオスマン朝史研究の 動向 (1970～1990年)

Recent Trends of the Ottoman Studies in Turkey 1970-1990

三 沢 伸 生^{*}
MISAWA Nobuo

元来、トルコにおけるオスマン朝史研究は、オスマン朝期における修史官・歴史家・著述家の著作に始まる。この間、欧米においてもトルコ学研究の一分野としてオスマン朝史研究が始まり、やがてハンメル (Joseph Freiherr von Hammer-Prugstall) に代表されるように近代的学問としての基礎を固め始めていたが、オスマン朝末期になると、オスマン朝支配領域下の民族問題をめぐって次第に反トルコ的になっていく。一方でこうした民族問題は逆にトルコ人にトルコ人自身による近代的歴史学研究の重要性を覚醒させた。こうしてトルコにおいても歴史学界が創始されて今日へ至る。トルコにおけるオスマン朝史研究は、この長い伝統のうえに立つ自国史研究の一部として数多くの成果をあげてきた。しかしながら問題がないわけではなく、現在でもなお分野・主題によっては欧米における研究のほうが成果をあげている例も見られる。それでもなおトルコにおけるオスマン朝史研究の水準は全般的にみて高い。今日、オスマン朝史研究を論ずる際にトルコにおける研究動向を常に把握しておくことが必要不可欠である。そこで本稿では主として1970年以降、現在に至るまでのトルコにおける学界動向を主だった研究成果を交えて紹介していくこととする。⁽¹⁾

この20年間にトルコでは1971年、1980年と2回の軍事クーデターが勃発し、政治・経済・社会的に激動のさなかにあって、その影響は少なからず学界にも及んでいる。また研究者の世代交代が進み、トルコ歴史学界を支えてきた指導者の多くがこの世を去り、かわって現在はその門下生たちが学界の中枢に位置し、さらにその下に数多くの若い研究者たちが続いている。こうした世代交代にともない若い学者たちの史料解読能力の未熟さをはじめ研究の質の低下がトルコ内外で指摘されている。⁽²⁾しかしながら一方で研究者の数が増加し、研究活動が極めて活発になったこともまた事実である。

さて、この20年のあいだに逝去された研究者たちのなかでも、まさに学界の重鎮であ

^{*} 慶応義塾大学大学院博士課程 Ph. D. Student, Keio University

るゼキ・ヴェリディ・トガン (Zeki Velidi Togan, 1970年没) 名誉教授, イスマイル・ハック・ウズンチャルシユル (İsmail Hakkı Uzunçarşılı, 1977年没) 名誉教授, オメル・ルトフィ・バルカン (Ömer Lütfi Barkan, 1979年没) 名誉教授, ターイブ・ギョクビルギン (Tayyib Gökbilgin, 1981年没) 教授がこの世を去られたことは学界にとって極めて大きな損失であった。また, こうした最古参の学者たちに続く世代の学者たちのあいだでも惜しまれながら世を去っていった人が多い。以下に列挙すれば, 政治・外交史の分野ではアクデス・ニメト・クラト (Akdes Nimet Kurat, 1971年没) 教授, エンヴェル・ズィヤ・カラル (Enver Ziya Karal, 1982年没) 教授, シェハベッティン・テキンダー (Şehabettin Tekindağ, 1983年没) 教授, ベキル・キュテュクオウル (Bekir Kütükoğlu, 1990年没) 教授。社会経済史の分野では, 将来を嘱望されていたムスタファ・アクダー (Mustafa Akdağ, 1973年没) とジェンギズ・オルホンル (Cengiz Orhonlu, 1976年没) 両教授が共に若くして急逝された。文化史の分野では, 近代思想史研究に業績を残されたヒルミ・ズィヤ・ウルケン (Hilmi Ziya Ülken, 1974年没) 教授, ジャヴィト・オルハン・テュテンギル (Cavit Orhan Tütengil, 1979年没) 教授, タールク・ザフェル・トゥナヤ (Tarık Zefer Tunaya, 1991年没) 教授が亡くなられた。文学史研究で名高いアギヤーフ・スッルウ・レヴェンド (Agâh Sırrı Levend, 1978年没) 氏, メフメット・カプラン (Mehmet Kaplan, 1986年没) 教授。美術史研究ではジェラル・エサド・アルセヴェン (Celal Esad Arseven, 1971年没) 教授, タフシン・オズ (Tahsin Öz, 1973年没) 元トプカプ宮殿博物館館長。オスマン朝史に関連するアルメニア語史料の紹介・翻訳に努めていたフランド・アンドレアスィヤン (Hrand Andreasyan, 1978年没) 教授も死去された。また民間ではニハル・アトスズ (Nihal Atsız, 1975年没) 氏, メフメット・ゼキ・パカルン (Mehmet Zeki Pakalın, 1972年没) 氏, レシャト・エクレム・コチュ (Reşat Ekrem Koçu, 1975年没) 氏, エクレム・ハック・アイヴェルディ (Ekrem Hakkı Ayverdi) 氏も逝去された。こうしたなかで, 古参の学者として今なお健在で定年退官後も非常に精力的に研究活動をされているのは, シェラフエッティン・トゥラン (Şerafettin Turan) 教授 ミュニル・アクテペ (Münir Aktepe) 教授ぐらいなものである。それぞれケマル・パシヤ・ザーデ (Kemal-paşa-zâde), ⁽³⁾アフメット・ルトフィ (Ahmet Lütfi) ⁽⁴⁾の年代記の校訂をはじめ評価の高い研究成果を発表されている。

こうした世代交代にともない研究者の数が著しく増えたことにより, 大学・研究機関で様々な変化が見られ, その研究が活性化された。現在, トルコには49の大学が設立されているが, そのうち12の大学で史学科が開設されている。ただ, 1981年に施行された「高等教育法 (Yüksek Öğretim Kanunu)」の影響は依然として大きく, 歴史研究にも

その波紋が及んでいる。⁽⁵⁾一方、研究機関のうち総理府古文書総局 (Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü) では、1989年に国際的なアルメニア問題論議を契機に改革が断行され、同問題関係の文書をはじめとする従来まで非公開だった文書の漸次公開、研究許可申請の簡略化、一部を除く複写制限の撤廃といった事業が行われた。今後、望むべきは文書の整理・分類作業の進展と、可能な範囲内での目録の出版事業であろう。トプカプ宮殿博物館古文書館 (Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi) では、待望の収蔵文書の目録の出版事業が始まった。⁽⁶⁾大学付属研究組織では、イスタンブール大学に付属する組織が重要である。元の名称に戻ったトルコ学研究所 (Türkiyat Enstitüsü) は現在移転作業中である。歴史学研究所 (Tarih Enstitüsü) は廃止され、かわって歴史研究センター (Tarih Araştırma Merkezi) が設立され、会議の開催や出版活動を行っている。イスラム調査研究所 (İslam Tetkikleri Enstitüsü) もイスラム研究センター (İslam Araştırma Merkezi) に引き継がれた。アンカラ大学でもオスマン朝史調査実行センター (Osmanlı Araştırma ve Uygulama Merkezi) が新設された。またマルマラ大学にもトルコ学調査実行センター (Türkiyat Araştırma ve Uygulama Merkezi) がある。

また、こうした大学・研究機関において、様々な会議・講演が開催されている。トルコ内外の学者が集う国際会議としては、トルコ歴史会議 (Türk Tarih Kongresi)、世界的な社会経済史研究の興隆のなか設立された国際トルコ社会経済史会議 (Uluslararası Türkiye'nin Sosyal ve Ekonomik Tarihi Kongresi)、国際トルコ学会議 (Milletlerarası Türkoloji Kongresi)、国内トルコ学会議 (Milli Türkoloji Kongresi)、アタチュルク会議 (Atatürk Konferansları) などがある。これより小規模な会議・講演の開催は枚挙にいとまがないほど多数で、なおかつ多岐な問題にわたって催されている。

このような状況の中、出版活動も賑いを見せ、トルコ語版『イスラム百科事典 (İslam Ansiklopedisi)』は、その刊行が遅々としてはかどらなかったものの、懸案の「Türk」の部の第12巻第2分冊が1988年に刊行され、全13巻15分冊でもって完結した。また先にあげた『トプカプ宮殿博物館古文書館収蔵文書目録』のほか、『キョプリュリュ図書館収蔵図書目録』⁽⁷⁾、『オスマン朝年鑑目録』⁽⁸⁾、『イスタンブール諸図書館収蔵アラビア文字出版定期刊行物総目録』⁽⁹⁾といった目録が刊行された。

次に各研究分野別の動向を眺める。トルコでは1928年にアラビア文字が廃止されてラテン文字が採用されて以来、アラビア文字による出版事業が不可能となり、復刻にも条件が付され、オスマン語史料の出版はラテン文字による校訂またはファクシミル版という形を取るざるをえない。こうしたなか史料の校訂・翻訳の分野では年代記などの叙述

史料と文書史料とは異なった傾向が見られる。上記のような状況に加えて、文献学の衰退により叙述史料に目立った成果が減ってきているのに対し、社会経済史研究の興隆に呼応して文書史料に大きな業績が多い。叙述史料の校訂では前述のケマル・パシヤ・ザーデ、アフメット・ルトフィの年代記のほか、マルマラ大学文理学部のミュジュテバ・イルギュレル (Mücteba İlgürel) 教授による『ヴァースフ史』⁽¹⁰⁾、総理府古文書総局局長で同大学アタチュルク教育学部のユースフ・ハラチュオウル (Yusuf Halaçoğlu) 教授によるジェヴデト・パシヤ (Cevdet Paşa) の『上奏』⁽¹¹⁾、イスタンブル大学文学部のメフメト・イプシルリ (Mehmet İpsirli) 教授による『セラーニキー史』⁽¹²⁾、ネシェト・チャータイ (Neşet Çağatay) 教授によるムスタファ・ヌーリー・パシヤ (Mustafa Nuri Paşa) の『諸事件の結末』⁽¹³⁾があげられる。また、アンカラ大学神学部のヒュセイン・ユルダイドン (Hüseyin Yurdaydın) 教授は、唯一人、精力的に文献学的に努めているが、自身が発見し話題をまいたマトラクチュ・ナスーフ (Matrakçı Nasuh) の『スルタン・スレイマン・ハンの両イラク駅停記』⁽¹⁴⁾をファクシミルと共に校訂出版した。こうした校訂やファクシミリ版とは別に現代トルコ語への翻訳も行われているが、問題が多い。訳者により転写表記法をはじめ、意識・誤訳・省略など様々な欠点が生じしばしば見受けられる。一方、文書史料はその重要性が広く認識され研究に大いに利用されるようになったために、外国人研究者も含む多くの研究者により多種多量に校訂・出版されるようになった。『史料 (Belgeler)』⁽¹⁵⁾誌の刊行は続いており、バルカン名誉教授の「イスタンブル諸宮廷における出納帳簿」やアメリカのシカゴ大学のハリル・イナルジク (Halil İnalçık) 教授の「ブルサのカーディー裁判記録選集」やイスタンブル大学文学部のギョクビルギン教授の「ヴェネツィア国立文書館収蔵トルコ語史料コレクションおよび我々に関係する重要史料」⁽¹⁷⁾などが優れている。ワクフ関係ではバルカン名誉教授が『イスタンブルのワクフ台帳』⁽¹⁸⁾を共著でまとめられた。文書の中でも重要で利用価値が高い「検地帳 (tahrir defteri)」ではバルカン名誉教授が共著で『ヒュダーヴェンディギャール県検地帳第1巻』⁽¹⁹⁾を、フェケテ (Lajos Fekete) の門下生であるハンガリー人研究者のギュラ・カールディ・ナギ (Gyula Káldy-Nagy) 氏が『スレイマン1世時代のブディン県検地帳』⁽²⁰⁾を、アメリカ人研究者のブルース・マクガバン (Bruce McGowan) 氏が『シレム県明細帳』⁽²¹⁾を、ガーズィー大学のレフェト・イナンチ (Refet Yinanç), メスート・エリビュニク (Mesut Elibüyük) 両助教授が『スレイマン1世時代のマラティヤ県検地帳』と『マラシュ県検地帳』⁽²²⁾を校訂・出版した。イスタンブル大学文学部のミュバハト・キュテュクオウル (Mübahat S. Kütükoğlu) 教授は『オスマン朝における公定価格制度と1640年付公定価格帳簿』⁽²³⁾のなかで「公定価格帳簿 (narh defteri)」の数字を丹念に検証して、イスタンブルを例に取りあげて市場経済の実態を

明らかにしている。同学部のオルホンル教授は『オスマン朝史にかんする史料：上奏文集（1597—1607年）』⁽²⁴⁾で、大宰相がスルタンへ報告するために諸事件を要約した上奏文（telhis）をまとめている。同大学経済学部のヒュセイン・オズデール（Hüseyin Özdeğer）⁽²⁵⁾助教授は『1463年から1640年までのブルサ市における遺産目録文書』においてオスマン朝の経済中心地の一つであるブルサ市を対象を限定して約2世紀という長期間わたる時間枠の中で「遺産目録文書（tereke defteri）」の記述を比較検討して都市経済の変化や社会生活の状態を明らかにする史料を提示した。同学部のハリル・サーヒリオウル（Halil Sahillioğlu）⁽²⁶⁾教授は、「1524—1525年のオスマン朝の収支一覧」で財政関係の文書を整理された。こうした一連の文書史料の校訂にも単語の表記法や校訂の仕方をめぐって論議がある。現段階において十分な論議がなされれば、将来的に同一種の文書が校訂・出版され蓄積されていき、地域・時代ごとに比較することが可能となつてより成果が上がることとなろう。

社会経済史の分野こそは、この20年間で著しい発展を見た分野である。⁽²⁷⁾その背景には近代世界システム論やアナル派の社会史研究に代表される近年の世界の歴史学界における社会経済史研究の興隆がある。事実、そうした海外の研究著作の多くはトルコ語に翻訳され、若手のトルコ人研究者にはその方法論を取り入れようとしている者たちも多い。しかし、現在の社会経済史研究の進歩をもたらしたのは、高度に発展したオスマン朝の官僚機構により作成・保存された膨大な量の文書であり、その重要性を指摘して史料の発掘・整理・研究を行ってきたフェケテヤルトフィ・バルカンなどの先駆者の業績によるものが大きい。上記のごとく最近では文書史料自体の校訂・出版がさかんである。同時に研究もこうした文書史料を縦横に駆使することが当たり前になっており、質の高い成果が多数生れてきている。バルカン名誉教授の『スレイマニエ・モスクと救貧院の建設』⁽²⁸⁾は幾多の文書を丹念に検証しながら同モスクの建設から救貧院の運営の実態に至るまでを解明した大作である。サーヒリオウル教授の「オスマン朝の通貨史における世界通貨と鉱山活動の位置（1300—1750年）」⁽²⁹⁾、「15世紀末と16世紀初頭ブルサにおける奴隷の社会・経済的生活における位置」⁽³⁰⁾、マルマラ大学文学部のメフメット・ゲンチ（Mehmet Genç）講師の「オスマン朝の財政におけるマリーキャーネ制度」⁽³¹⁾、「17世紀のオスマン朝経済と戦争」⁽³²⁾といった論考が注目される。このほか経済史研究ではミュバハト・キュテュクオウル教授の『オスマン朝とイギリスの経済関係（1580—1850年）』⁽³¹⁾やセルチューク大学文学部のネジャト・ギョюнチ（Nejat Göyünç）教授の「16世紀における南東アナトリアの経済状態」⁽³²⁾がある。ハジェテペ大学経済学部のオスマン・オクヤル（Osman Okyar）教授は主に欧文で多数の研究を発表されている。若手研究者のうちチャーラル・ケイデル（Cağlar Keyder）、シェヴケト・パムック（Şevket Pamuk）、

ヒュセイン・ラマザンオウル (Hüseyin Ramazanoğlu) などは近代世界システム論の方法論を積極的に導入した研究を行っている。彼らもまた欧文での研究発表が多いが、ケイデルの「オスマン朝経済とオスマン朝財政 (1881—1914年)」やパムックの『オスマン朝経済と世界資本主義 (1820—1913年)』⁽³³⁾⁽³⁴⁾はそうした研究の良い例である。一方、中東工科大学からドイツのミュンヘン大学へ転出されたスライヤ・ファローキー (Suriya Faroqi) 教授はアナール派の社会史研究に強く影響されて、都市・農村・商工業などについて精力的に研究を行っている。社会学的方法論を駆使した研究を得意としたオルホンル教授は『オスマン朝の南方政策：エチオピア州』、⁽³⁵⁾『オスマン帝国における都市計画と通信伝達についての研究』⁽³⁶⁾という著作を残された。その急逝は学界にとって大きな損失であったが、その方法論は弟子のハラチュオウル教授に受け継がれ、オルホンル教授に献呈された『18世紀におけるオスマン朝の徙民政策と遊牧民の強制定住』⁽³⁷⁾といった研究に結実している。またアンカラ大学言語歴史地理学部のヤヴズ・エルジャン (Yavuz Ercan) 教授の『オスマン帝国におけるブルガリア人と馬丁職』⁽³⁸⁾はバルカン半島においてブルガリア人から徴用されたヴォイヌク (voynuk) と呼ばれる軍事組織のなかの馬丁職を社会的に分析したもので興味深い。一方、最近はこうした社会経済史研究の方法を導入した地方史研究が非常がさかんである。たとえば、イスタンブール文学部のイスメット・ミールオウル (İsmet Miroğlu) 教授の『16世紀におけるパイブルト県』と『ケマフ県とエルズィンジャン郡 (1520—1566年)』⁽³⁹⁾、同学部のフェリドゥーン・ムスタファ・エメジェン (Feridun Mustafa Emecen) 助教授の『16世紀におけるマニサ郡』、⁽⁴⁰⁾経済学部のオズデール助教授の『16世紀の検地帳によるアンテプの社会経済状況』と『16世紀におけるフィンターブ県』⁽⁴¹⁾、ユーゲ大学のゼキ・アルカン (Zeki Arıkan) 教授の『15—16世紀におけるハミト県』⁽⁴²⁾、ハジエテベ大学のバハエディーン・イェディユルドゥズ (Bahaeddin Yediyıldız) 教授の『オルドゥ郡の社会史 (1455—1613年)』⁽⁴³⁾、5月19日大学のメフメット・アリー・ウナル (Mehmet Ali Ünal) 助教授の『16世紀におけるハルプト県 (1518—1566年)』⁽⁴⁴⁾、アンカラ大学言語歴史地理学部のオゼル・エルゲンチ (Özer Ergenç) 教授の「1605—1615年におけるアンカラの経済史にかんする研究」など枚挙にいとまがないほどである。しかし、こうした研究の多くは研究者の出身地または奉職先を対象としたものであり、極めて詳細ではあるがオスマン朝史の中での位置付けに弱い。単なる地方史研究に留まることなく、今後は研究者同士の交流のなかで同時期で他地域との比較、同地域の長時間における変化を追うなどの作業からオスマン朝史の全体像を構築するような方向を指向することが必要であろう。

法制・制度史の分野は依然として未開拓な分野として残されている。法制史全般の動きを知るにはアンカラ大学法学部のジョシュクン・ユチョク (Coşkun Üçok) 教授とア

フメット・ムムジュ (Ahmet Mumcu) 教授の共著『トルコ法制史』⁽⁴⁶⁾ がよい。チャータイ教授も健在で、「イスラム法の基本線とオスマン朝によるその諸規則の異なる適用」⁽⁴⁷⁾ が興味深い。最近ではセルチューク大学のアフメット・アクギュンドゥズ (Ahmet Akgündüz) 助教授が大作を発表している。『シャリーア法廷裁判記録』⁽⁴⁸⁾ は各地に分散するカーディー (kadi) の開廷する裁判の記録を丹念に追ってカタログ化し、その重要性を述べる。『オスマン朝の法令集とその法的分析』⁽⁴⁹⁾ もまた各地域・各時代ごとに作成された「法令集 (kanunnâme)」を徹底的に収集して一部マイクロ版も添付して校訂・出版し、その意義づけを行なうという壮大な研究であり、完結すればルトフィ・パルカン名誉教授によって編纂された法令集集成をしのぐものとなろう。また同大学のハリル・ジン (Halil Cin) 教授は『オスマン朝の土地制度とその崩壊』⁽⁵⁰⁾ など土地制度・土地法にかんしての研究で名高い。制度史では特に行政制度の研究が目を引く。「高等教育法」に抗議して一時は大学を辞した、アンカラ大学政治学部のイルベル・オルタイル (İlber Ortaylı) 助教授の『トルコ行政史』⁽⁵¹⁾ は行政制度の概観を知るうえで簡便である。そのほか『タンジマート以降の地方行政 (1840—1878年)』、『タンジマートから共和国へ至るまでの地方行政の伝統』⁽⁵²⁾ において19世紀のタンジマート期における地方行政制度の改革とその変容の実態とを明らかにする。また、イギリスのケンブリッジ大学のメティン・クント (İ. Metin Kunt) 氏は『県から州へ』⁽⁵³⁾ で県 (sancak) や州 (eyalet) のレベルでの地方行政制度の研究を発表したが、問題が多く批判されている。そのほかトルコ歴史協会会長でアンラ大学言語歴史地理学部のヤシャル・ユージェル (Yaşar Yücel) 教授の「オスマン朝の非中央集権化についての概観」⁽⁵⁴⁾ が興味深い論文である。だが、中央と違い地方の支配機構については依然不明な点が多く課題として残されている。その一方、中央の国家組織では同学部のアィドゥン・タネリ (Aydın Taneri) 教授が『オスマン帝国の建国期における大宰相職』と『オスマン国家の建国期における支配機構の発展と宮廷生活組織』の2作品でオスマン朝初期について詳細な研究を行なっている。⁽⁵⁵⁾ そのほか行政制度の一端を担っていた市場・エスナーフ (ギルド) における市場監督組織 (ihtisab) とその長 (muhtesib) についてマルマラ大学神学部のズィヤ・カズジユ (Ziya Kazıcı) 助教授が『オスマン朝における市場監督組織』⁽⁵⁶⁾ を発表されている。

政治・外交史の分野では、アクテベ教授が健筆を奮われている。「1711年におけるブルート戦役にかんする諸史料」⁽⁵⁷⁾、「マフムト2世時代におけるオスマン朝とサルディニヤの関係にかんする諸史料」など史料を掘り起す一方で様々な問題についての論考を発表されている。ウズンチャルジュル名誉教授は『聖メッカのアミール』と『チャンダルル宰相家』⁽⁵⁸⁾ で政治的に大きな力を有した両者の事跡を明らかにされた。この分野では中世・近世史研究に大きな成果が少ない一方で、近代史研究に傑出した研究が多い。オルタ

イル助教授は『アブデュルハミト 2 世期のオスマン帝国におけるドイツの影響』、19世紀の政治動向を扱う『帝国の一番長い世紀』を著わした。⁽⁵⁹⁾ そのほかにはイスタンブール大学政治学部のシュクリュ・ハーニーオウル (Şükrü Hanioglu) 教授、ボアジチ大学文理学部のザフェル・トブラク (Zafer Toprak) 助教授などが注目される。⁽⁶⁰⁾ 外交史ではイスタンブール大学文学部のケマル・ベイディリ (Kemal Beydili) 教授の『1740年のオスマン朝とプロシアの同盟』、⁽⁶¹⁾ マルマラ大学文理学部のジェヴデト・キュチュク (Cevdet Küçük) 助教授の『オスマン朝外交におけるアルメニア問題の出現 (1878—1897年)』、⁽⁶²⁾ 9月9日大学のサーリフ・オズバラン (Salih Özbaran) 教授の「16世紀のペルシア湾沿岸におけるオスマン朝の人々」、⁽⁶³⁾ トゥラン教授の『トルコ=イタリア関係』⁽⁶⁴⁾ などがあげられる。また、ボアジチ大学文理学部のミム・ケマル・オケ (Mim Kemal Öke) 教授はオスマン朝治下の民族紛争に関心を抱き、『アブデュルハミト 2 世とシオニストとパレスチナ問題』や『南アジアのイスラム教徒の独立問題とトルコ民族闘争：ヒラーファト運動 (1919—1926年)』などトルコでは従来ほとんど研究されてこなかった問題について意欲的に取り組んでいる。⁽⁶⁵⁾

文化史の分野では、かつてアドナン・アドゥヴァル (Abdülhak Adnan Adıvar, 1955 年没) というすぐれた先駆者がいたが、最近フォラン教授が『トルコ文化史』を著わし話題をまいた。⁽⁶⁶⁾ 思想史とくに近代思想史研究には先にあげたハーニーオウル教授、トブラク助教授はじめ研究に新たな展開が見られる。⁽⁶⁷⁾ 文学史研究ではレヴェンド氏の『トルコ文学史第 1 巻』と⁽⁶⁸⁾ イスタンブール大学文学部のカプラン教授の『トルコ文学研究第 1 巻』が重要であるが、⁽⁶⁹⁾ 両者ともに逝去され続巻が発刊されなかったことは誠に残念である。カプラン教授の門下生でマルマラ大学アタチュルク教育学部のインジ・エンギニョン (İnci Enginün) 教授の『ハリデ・エディプ・アドゥヴァルの作品のなかの東西問題』⁽⁷⁰⁾ は力作である。演劇史ではメティン・アンド (Metin And) 氏の『オスマン朝祭典におけるトルコ芸術』、⁽⁷¹⁾ オズデミル・ヌトゥーク (Özdemir Nutuk) 氏の『メフメット 4 世のエディルネ祭典』⁽⁷²⁾ が興味深い。美術・建築研究では、イスタンブール大学文学部のオクタイ・アスラナバ (Oktay Aslanapa) 教授の『トルコ芸術』、⁽⁷³⁾ アイヴェルディ氏の『オスマン朝建築におけるメフメット 1 世とムラト 2 世時代』と⁽⁷⁴⁾ 『オスマン朝建築におけるメフメット 2 世時代』とその続編でアイドゥン・ユクセル (İ. Aydın Yüksel) 氏の『オスマン朝建築におけるバヤズィット 2 世とセルム 1 世時代』⁽⁷⁵⁾ といった研究が記述史料に乏しい初期史研究に有益な情報を提供している。

以上のように、この20年のあいだにトルコにおけるオスマン朝史研究は、個々に問題がないわけではないが、あらゆる部門において詳細ですぐれた成果を生み出してきた。こうして蓄積された諸研究がそれ自体で完結することなく、相互に連係して、オスマン

朝史の全体像の解明に結実することが望まれる。そうした作業に参加するためにも我々は常にトルコにおける研究動向・研究成果に注目していかなくてはならないと思う。

注

- (1) 1970年に至るまでの動向については、永田雄三「トルコにおけるオスマン朝史研究の近況」『オリエント』11-3・4, 1970年, 161-181頁参照。
- (2) 例えば、護雅夫「トルコの政情とアジア研究の現状の一端」『学術月報』35-10, 1983年, 686-690頁, 堀川徹「トルコでの学術研究」『学術月報』38-6, 1985年, 415-419頁参照。
- (3) ケマル・パシヤ・ザーデの『オスマン家年代記 (*Tevârih-i âl-i Osmân*)』の校訂は1954—57年に2巻本で出版された第7巻に始まり, 1970年に第1巻 (*İbn-i Kemal Tevârih-i âl-i Osmân*, I. Defter, Ankara, 1970), 1983年に第2巻 (*İbn-i Kemal, Tevârih-i âl-i Osmân*, II. Defter, Ankara, 1983) が出版された。
- (4) アフメト・ルトフィの『ルトフィ史 (*Tarih-i Lütî*)』は1873—1912年にオスマン語で出版された第1巻から第8巻までについて, 1984年に第9巻の校訂が出版され (*Ahmet Lütî, Vak'anüvis Ahmet Lütî Efendi Tarihi*, 9. cilt, İstanbul, 1984), 1988年に第10巻, 1989年に第11巻と12巻, 1990年に第13巻が出版されている。
- (5) 「高等教育法」とその影響については, 護, 前掲, 686-690頁および, 堀川, 前掲, 415-419頁参照。
- (6) 収蔵文書目録は第2次大戦前に一部のみ出版されただけで頓挫したが, これとは別に新たに文書別に目録が企画され, 現在までに第2巻までが出版されている (*İ. H. Uzunçarşılı, İ. K. Baybura & Ü. Altındağ* (eds.), *Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi Kataloğu, Fermanlar, I. Fasikül*, Ankara, 1985, id., *Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi Kataloğu. Hükümler-Beratlar, II. Fasikül*, Ankara, 1988)。
- (7) Ramazan Şeşen, Cevdet İzgi & Cemil Akpınar (eds.), *Köprülü Kütüphanesi Yazmalar Katalogu*, 3 vols., İstanbul, 1986。
- (8) Hasan Duman, *Osmanlı Yıllıkları (Salnameler ve Nevsaller)*, İstanbul, 1982。
- (9) id., *İstanbul Kütüphaneleri Arap Harfli Süreli Yayınlar Toplu Kataloğu (1828-1928)*, İstanbul, 1986。
- (10) これは同書のオスマン語による出版部分以降の未刊部分のうち A. H. 1196—1201年の部分の校訂である (*Ahmed Vasıf Efendi, Mehâsinü'l-âsâr ve hakâikü'l-ahbâr*, İstanbul, 1978.)。
- (11) Ahmed Cevdet Paşa, *Ma'rûzât*, İstanbul, 1980。
- (12) Selânikî Mustafa Efendi, *Tarih-i Selânikî*, 2 vols., İstanbul, 1989。
- (13) Mustafa Nûrî Paşa, *Netayic ü'l-Vukûat*, 2 vols., Ankara, 1979-80。
- (14) Matrakçı Nasuh, *Beyân-ı Menâzil-i Sefer-i Irâkeyn-i Sultân Süleymân Hân*,

Ankara, 1976.

- (15) Ö. L. Barkan, “İstanbul Saraylarına ait Muhasebe Defteri (855–886/1451–1481),” *Belgeler*, 9, 1979, pp. 1–380.
- (16) H. İnalcık, “Osmanlı İdare, Sosyal ve Ekonomik Tarihiyle ilgili Belgeler : Bursa Kadı Sicillerinden Seçmeler,” *Belgeler*, 10–14, 1980–81, pp. 1–91, id., Osmanlı İdare, Sosyal ve Ekonomik Tarihiyle ilgili Belgeler : Bursa Kadı Sicillerinden Seçmeler II,” *Belgeler*, 17, 1988, pp. 1–41.
- (17) T. Gökbilgin, “Venedik Devlet Arşivindeki Türkçe Belgeler Koleksiyonu ve Bizimle ilgili Değer Belgeler,” *Belgeler*, 5–8, 1971, pp. 1–151.
- (18) Ö. L. Barkan & E. H. Ayverdi, *İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri 953 (1546) Tarihli*, İstanbul, 1970.
- (19) Ö. L. Barkan & Enver Meriçli, *Hüdavendigâr Livası Tahrir Defterleri*, vol. 1, Ankara, 1988.
- (20) G. Káldy-Nagy, *Kanunî Devri Budin Tahrir Defteri 1546–1562*, Ankara, 1971.
- (21) B. McGowan, *Sirem Sancağı Mufassal Tahrir Defteri*, Ankara, 1983.
- (22) R. Yinanç & M. Elibüyük, *Kanunî Devri Malatya Tahrir Defteri (1560)*, Ankara, 1983, id., *Maraş Tahrir Defteri (1563)*, 2 vols., Ankara, 1988.
- (23) M. S. Kütükoğlu, *Osmanlılarda Narh Müessesesi ve 1640 Tarihli Narh Defteri*, İstanbul, 1983.
- (24) C. Orhonlu, *Osmanlı Tarihine ait Belgeler Telhisler 1597–1607*, İstanbul, 1970.
- (25) H. Özdeğer, *1463–1640 Yılları Bursa Şehri Tereke Defterleri*, İstanbul, 1988.
- (26) H. Sahillioğlu, “1524–1525 Osmanlı Bütçesi,” *İstanbul Üniversitesi İktisat Fakültesi Mecmuası*, 41/1–4, 1984, pp. 415–458.
- (27) トルコにおける社会経済史研究については、拙稿「オスマン朝社会経済史研究とフエローキー」『日本中東学会年報』3–2, 1988年, 219–243頁参照。
- (28) Ö. L. Barkan, *Süleymaniye Cami ve İmaret İnşaatı*, 2 vols., Ankara, 1972–79.
- (29) H. Sahillioğlu, “Osmanlı Para Tarihinde Dünya Para ve Maden Hareketinin Yeri (1300–1750),” *Gelişme Dergisi*, 1978 Özel Sayısı, 1979, pp. 1–38. 英訳あり (id., “The Role of International Monetary and Metal Movements in Ottoman Monetary History (1300–1750),” in *Precoins Metal in the Later Medieval and Early Modern World* (J. F. Richards ed.), Duham, 1983, pp. 269–304.), id., “Onbeşinci Yüzyılın Sonu ile Onaltıncının Başında Bursa’da Kölelerinin Sosyal ve Ekonomik Hayattaki Yeri,” *Gelişme Dergisi*, 1979–80

- Özel Sayısı, 1980, pp. 67–138. 英訳あり (*id.*, “Slaves in the Social and Economic Life of Bursa in the Late 15th and Early 16th Centuries,” *Turcica*, 17, 1985, pp. 43–112.)。
- (30) M. Genç, “Osmanlı Maliyesinde Malikâne Sistemi,” in *Türkiye İktisat Tarihi Semineri* (O. Okyar, H. N. Nalbantoğlu eds.), Ankara, 1975, pp. 231–296, *id.*, “XVII. Yüzyılda Osmanlı Ekonomisi ve Savaş,” *Yapıt*, 49–4, 1984, pp. 52–61; 50–5, 1984, pp. 33–77.
- (31) M. S. Kütükoğlu, *Osmanlı-İngiliz İktisadî Münasebetleri* (1580–1850), 2 vols, İstanbul, 1974–76.
- (32) N. Göyünç, “XVI. Yüzyılda Güney-Doğu Anadolu’nun Ekonomik Durumu,” in *Türkiye İktisat Tarihi Semineri* (O. Okyar, H. N. Nalbantoğlu eds.), Ankara, 1975, pp. 71–102.
- (33) Ç. Keyder, “Osmanlı Ekonomisi ve Osmanlı Maliyesi (1881–1914),” *Toplum ve Bilim*, 8, 1979, pp. 35–43.
- (34) Ş. Pamuk, *Osmanlı Ekonomisi ve Dünya Kapitalizmi* (1820–1913), Ankara, 1984. 英訳あり (*id.*, *The Ottoman Empire and European Capitalism 1820–1913*, Cambridge, 1987.)。
- (35) フォローキーとその研究については、前掲、拙稿、219–243頁参照。
- (36) C. Orhonlu, *Osmanlı İmparatorluğunun Güney Siyaseti: Habeş Eyaleti*, İstanbul, 1974, *id.*, *Osmanlı İmparatorluğunda Şehircilik ve Ulaşım üzerine Araştırmalar*, İzmir, 1984.
- (37) Y. Halaçoğlu, *XVIII. Yüzyılda Osmanlı İmparatorluğu’nun İskan Siyaseti ve Aşiretlerin Yerleştirilmesi*, Ankara, 1988.
- (38) Y. Ercan, *Osmanlı İmparatorluğu’nda Bulgarlar ve Voynuklar*, Ankara, 1986.
- (39) İ. Miroğlu, *XVI. Yüzyılda Bayburt Sancağı*, İstanbul, 1975, *id.*, *Kemah Sancağı ve Erzincan Kazası (1520–1566)*, Ankara, 1990.
- (40) F. M. Emecen, *XVI. Asırda Manisa Kazâsı*, Ankara, 1989.
- (41) H. Özdeğer, *XVI. Yüzyıl Tahrir Defterlerine göre Antep’in Sosyal ve Ekonomik Durumu*, İstanbul, 1982, *id.*, *Onaltıncı Asırda Ayıntâb Livası*, vol.1, İstanbul, 1988.
- (42) Z. Arıkan, *XV–XVI. Yüzyıllarda Hamit Sancağı*, İzmir, 1988.
- (43) B. Yediyıldız, *Ordu Kazası Sosyal Tarihi (1455–1613)*, Ankara, 1985.
- (44) M. A. Ünal, *XVI. Yüzyılda Harput Sancağı (1518–1566)*, Ankara, 1989.
- (45) Ö. Ergenç, “1600–1615 Yılları arasında Ankara İktisadî Tarihine ait Araştırmalar,” in *Türkiye İktisat Tarihi Semineri* (O. Okyar, H. N. Nalbantoğlu eds.), Ankara, 1975, pp. 145–168.

- (46) C. Üçok & A. Mumcu, *Türk Hukuk Tarihi*, Ankara, 1976.
- (47) N. Çağatay, “İslam Hukuk Ana Hatlar ve Osmanlıların Bunun Bazı Kurallarını Değişik Uygulamalar,” *Belleten*, 200, 1987, pp. 625–641.
- (48) A. Akgündüz, *Şer’iye Sicilleri*, Vol. 1, 2–, İstanbul, 1988, 89–.
- (49) id., *Osmanlı Kanunnameleri ve Hukukî Tahlilleri*, vol. 1, 2–, 1990–.
- (50) H. Cin, *Osmanlı Toprak Düzeni ve Bu Düzenin Bozulması*, Ankara, 1978.
- (51) İ. Ortaylı, *Türkiye İdare Tarihi*, Ankara, 1979.
- (52) id., *Tanzimattan Sonra Mahalli İdareler (1840–1878)*, İstanbul, 1974, id., *Tanzimattan Cumhuriyete Yerel Yönetim Geleneği*, İstanbul, 1985.
- (53) İ. M. Kunt, *Sancaktan Eyalete*, İstanbul, 1978. 英訳あり (id., *The Sultan’s Servants*, New York, 1983.).
- (54) Y. Yücel, “Osmanlı İmparatorluğunda Desentralizasyona (Adem-i Merkeziyet) dair Genel Gözlemler,” *Belleten*, 152, 1974, pp. 667–708.
- (55) A. Taneri, *Osmanlı İmparatorluğu’nun Kuruluş Döneminde Vezir-i Azamlık*, Ankara, 1971, id., *Osmanlı Devletinin Kuruluş Döneminde Hükümdarlık Kurumunun Gelişmesi ve Saray Hayat Teşkilatı*, Ankara, 1978.
- (56) Z. Kazıcı, *Osmanlılarda İhtisab Müessesesi*, İstanbul, 1987.
- (57) M. Aktepe, “1711 Prut Seferi ile ilgili Bazı Belgeler,” *Tarih Dergisi*, 34, 1983–84, pp. 19–54, id., “II. Mahmud Devrinde Osmanlı–Sardunya Münasebetlerine dâir Bâzi Belgeler,” *Belgeler*, 11–15, 1981–86, pp. 89–114.
- (58) İ. H. Uzunçarışılı, *Mekke-i Mukerreme Emirleri*, Ankara, 1972, id., *Çandarlı Vezir Ailesi*, Ankara, 1974.
- (59) İ. Ortaylı, *İkinci Abdülhamit Döneminde Osmanlı İmparatorluğunda Alman Nüfuzu*, Ankara, 1981, id., *İmparatorluğun En Uzun Yüzyılı*, İstanbul, 1983.
- (60) 両者とその著作については、新井政美「トルコにおけるトルコ近代史研究の新潮流」『日本中東学会年報』4–2, 1989年, 251–264頁参照。
- (61) K. Beydili, *1740 Osmanlı–Prusya İttifâkı*, İstanbul, 1984.
- (62) C. Küçük, *Osmanlı Diplomasinde Ermeni Meselesinin Ortaya Cıkış (1878–1897)*, İstanbul, 1984.
- (63) S. Özbaran, “XVI. Yüzyılda Basra Körfez Sahillerinde Osmanlılar,” *Tarih Dergisi*, 25, 1971, pp. 51–72.
- (64) Ş. Turan, *Türkiye–İtalya İlişkileri*, vol. 1, İstanbul, 1990. 同書は以下続巻で全4巻の予定となっている。
- (65) M. K. Öke, *II. Abdülhamid, Siyonistler ve Filistin Meselesi*, İstanbul, 1981, id., *Güney Asya Müslümanlarının İstiklal Davası ve Türk Milli Mücadelesi : Hilafet Hareketi 1919–1926*, Ankara, 1982.
- (66) Ş. Turan, *Türk Kültür Tarihi*, İstanbul, 1990.

- (67) 近代思想史研究については、前掲、新井論文参照。
- (68) A. S. Levend, *Türk Edebiyat Tarihi*, vol. 1, Ankara, 1973.
- (69) M. Kaplan, *Türk Edebiyat üzerine Araştırmalar I.*, İstanbul, 1976.
- (70) İ. Enginün, *Halide Edip Adivar'ın Eserlerinde Doğu ve Batı Meselesi*, İstanbul, 1978.
- (71) M. And, *Osmanlı Şenliklerinde Türk Sanatları*, Ankara, 1982.
- (72) Ö. Nutku, *IV. Mehmet'in Edirne Şenliği*, Ankara, 1972.
- (73) O. Aslanapa, *Türk Sanatı*, 2 vols., İstanbul, 1972-73.
- (74) E. H. Ayverdi, *Osmanlı Mimarisinde Çelebi ve II. Sultan Murad Devri* (806-855/1401-1451), İstanbul, 1972, id., *Osmanlı Mimarisinde Fatih Devri* (855-886/1451-1481), 2 vols. İstanbul, 1973-74.
- (75) İ. A. Yüksel, *Osmanlı Mimarisinde II. Bayazid, Yavuz Selim Devri* (886-928/1481-1520), İstanbul, 1983.

〔付記〕 本稿脱稿後に、羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究』（東大出版会、1991年）が出版され、その中の林佳世子氏による詳細なトルコ都市研究史を本稿では活用できなかったのもので、合わせて御覧いただければ幸いです。